

先人たちが残してくれた

「災害の記憶」を未来に伝えるⅦ

－ 命と文化遺産とを守るために －
【田辺市・上富田町】



和歌山県立博物館施設活性化事業実行委員会

この冊子を読まれる皆さんに

平成23年(2011)9月の紀伊半島大水害から10年がたちました。この災害によって、たくさんの尊い命と財産(文化遺産を含む)が奪われました。今後も洪水や土砂災害、さらに東海・東南海・南海3連動地震や南海トラフ巨大地震の起こる可能性が指摘されています。

こうした災害から自らの命と財産(文化遺産を含む)を守るための活動を、日ごろから継続しておこなっていく必要があります。その一環として、わたしたちは災害が起こる前に、地域に眠る過去の「災害の記憶」を呼び起こし、地域の人々に伝えていくことが必要であり、津波や洪水による浸水が予想される地域に残されている文化遺産を把握することも大切であると考えています。

和歌山県域には、地震津波被害や洪水被害の想定される対象地域が広範囲に及んでいることを踏まえ、令和3年度は田辺市(旧田辺市域及び旧大塔村域)・上富田町を対象に、「災害の記憶」の発掘と文化遺産の所在確認をおこないました。この冊子では、その調査成果の一部を紹介しています。

この冊子が、これから起こりうる災害に対して、自らの命と身近にある地域の貴重な文化遺産を守っていく活動への一助となることを期待してやみません。

令和4年2月26日

和歌山県立博物館施設活性化事業実行委員会

委員長 伊東 史朗

*この冊子は、『令和3年度文化庁地域と共働した博物館創造活動支援事業』に基づき、和歌山県立博物館施設活性化事業実行委員会が実施した「地域に眠る『災害の記憶』と文化遺産を発掘・共有・継承する事業」の成果です。

*和歌山県立博物館施設活性化事業実行委員会は、和歌山県立博物館、歴史資料保全ネット・わかやま、和歌山県立和歌山工業高等学校で構成されています。

*本事業の調査員は下記の通りです。(五十音順)

新井美那 後 誠介 鈴木裕範 砂川佳子 玉置将人 藤 隆宏 西山史朗 橋本唯子 浜田拓志 前田正明 松原瑞枝 吉村旭輝

なお、本書では田中元浩氏にもご執筆いただきました。

*本書の編集は前田がおこないました。

*表紙 上段：江戸時代の田辺城下及び周辺の景観(『熊中奇観 下巻』和歌山県立博物館蔵)

下段：八上王子(上富田町)を訪れた西行が瑞垣に和歌を書き記している様子(『西行物語絵巻』和歌山県立博物館蔵)

目 次

この冊子を読まれる皆さんに	2
この冊子で主に取りあげる過去の災害	3
1707年宝永地震津波の記憶(田辺市[田辺城下・周辺村々])	4
1854年安政地震津波・火災の記憶(田辺市[田辺城下・周辺村々])	6
1889年明治大水害の記憶(田辺市[旧田辺城下・湊])	8
1889年明治大水害の記憶(上富田町朝来)	10
1889年・2011年大水害の記憶(田辺市長野・伏菟野・熊野)	12
龍松山城跡と山本氏(上富田町市ノ瀬)	14
和歌山県内に所在する自然災害伝承碑とウェブ地図	16

この冊子で主に取りあげる過去の災害

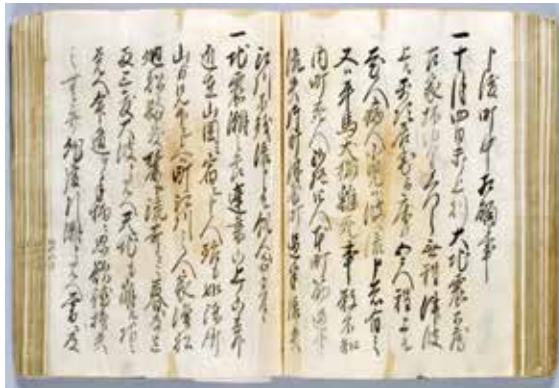
1707年宝永地震津波 宝永4年10月4日(1707年10月28日)午後2時ごろ、静岡県御前崎沖から四国沖を震源域(M8.6と推定)とする、有史以来の最大級の地震とそれに伴う津波が発生しました。和歌山県域でもかなりの被害があったと想定されていますが、被害の状況を伝える記録はあまりありません。

1854年安政地震津波 嘉永7年(安政元年)11月4日(1854年12月23日)午前9時ごろ、遠州灘沖を震源とする東海地震とそれに伴う津波が発生し、その約32時間後の5日午後5時ごろ、紀伊半島沖を震源とする南海地震とそれに伴う津波が発生しました。いずれもM8.4と推定され、この地震津波によって多くの被害が出ました。これに関する記録は、比較的多く残されています。

1889年明治大水害 明治22年(1889)8月18日から20日にかけて、四国・中国を北上した台風の影響で、和歌山県・奈良県は豪雨に襲われました。紀の川・有田川・日高川・富田川・日置川・熊野川などの河川が激しく氾濫し、日高郡・西牟婁郡・東牟婁郡を中心に死者は1,247人、流失家屋や倒壊家屋は5,199戸にも及びました。

2011年紀伊半島大水害 平成23年(2011)9月はじめ、四国・中国を北上した台風12号は、紀伊半島3県に豪雨による甚大な被害をもたらしました。和歌山県域の被害は、死者・行方不明者は61人、家屋の全壊・半壊・一部破損・床上浸水・床上浸水は併せて7,933棟とされています。

- 所在地 田辺市東陽1の1
- 関連する災害 宝永地震津波
- 制作された年 18世紀後半以降
- 材質 紙製(和紙)
- サイズ 縦27・3cm 横20・7cm
- 文化財に指定された日 昭和45年(1970)5月25日



和歌山県指定文化財
田辺町大帳 五
闘雞神社蔵

田辺町大帳には、宝永4年(1707)10月4日午後2時ごろ大きな地震が起こり、まもなく津波が来て、日が暮れるまで2~3度襲って来たこと、そして人が居なくなった町中で盗賊も出てきたことが記されています。

田辺城下の町方(町人地)・江川では、地震による家屋の倒壊、津波による家屋の流失の被害が甚大でした。町人地よりも高所にあった武家地では、家屋の流失は比較的少なかったようです。城下周辺の村々では、特に新庄村で家屋の倒壊・流失の被害が甚大でした。

城下の町方・江川や城下周辺の村々では、被災者への救済(救い米・麦種子・農具の貸し渡しなど)が行われました。城下と江川とに架かる大橋が流失し、翌年に再建され、崩れた石垣や土手の改修も行われました。ところが、正徳5年(1715)6月に会津川洪水が起こり、左岸の小泉土手が決壊し、町方が浸水し、再び大橋も流されました。

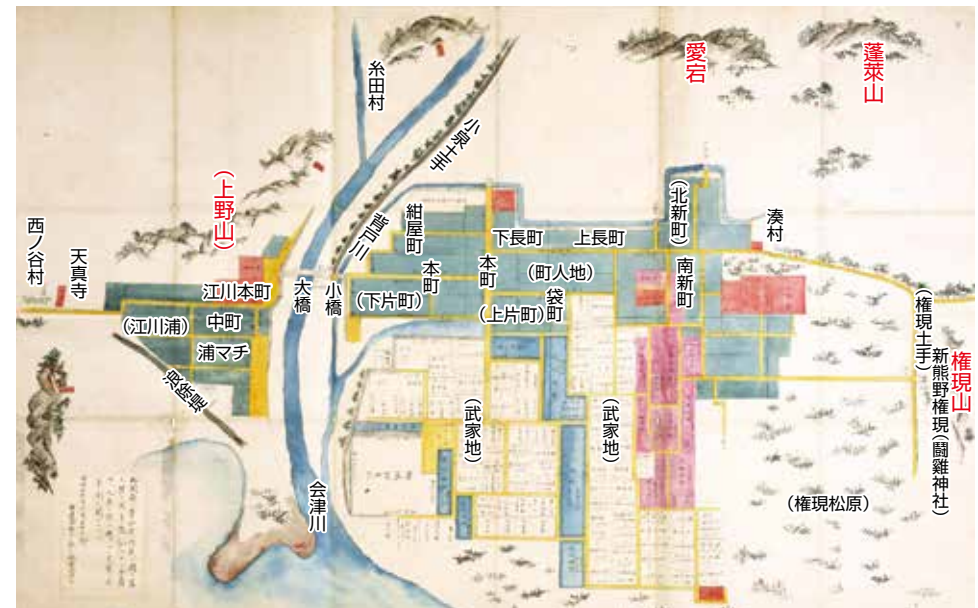
享保3~4年(1718~19)には小泉土手が嵩上げされ、江川に浪除堤(なみよけつつみ)が築造されます(田辺城下図)。大正9年(1920)宅地化に伴い、浪除堤は切り崩されましたが、痕跡は今も残っています。

田辺城下・周辺村々における宝永地震津波の被害

	町分	江川	西ノ谷	目良	糸田	神子浜	敷	新庄	合計
流失家屋	154	225	21	5	3	26	20	185	639
倒壊家屋	257	55	19	3		11	16		361
死者	7	13	2			1	1	3	27

*町分(田辺城下町)の倒壊家屋には大破家屋も含む(蔵は含まない)。

*『万代記』(闘雞神社蔵)・『亥十月四日大地震大波書上ヶ扣 田辺組』(田所文書)から作成。



田辺市指定文化財 田辺城下図 田辺市立図書館蔵

【現代語訳】(大意)

10月4日午後2時ごろ大きな地震があり、土蔵や古家などは揺り崩れ、程なく津波が上がってきた。(多屋)平次居宅では床から1・5mほど上まで水がきた。老人・病人・子どものなかには波に流される者もいた。牛・馬・犬・猫・鶏は数知れないほど死んだ。内町では死者24人、本町筋・片町・紺屋町では半分以上、江川では残らず家が流され、飢えた人が多く出た。

津波が起こった時、蓬萊山・上野山などで一夜を過ごした人は、あたかも陣屋に詰めているようであった。見下ろせば、町や江川の家や船が麓へ流し寄せられ、日が暮れるまでに大波が2・3度襲い、天地も崩れるように思

われた。命が助かったことを手柄と思い、欲徳や損失の弁(わきま)えがけない。ところが引き潮が見え、日が暮れたころ、山から見えるのは松明(たいまつ)や提灯の明かりで、家の道具などを打ち砕いている音は聞こえるが咎める者はなく、流れ残った家の道具などが盗まれるのは数知れない。取り締まりはされているが、盗み取られた諸道具は出てこず、津波に流されても流されなくても、一日で失ってしまったのは前代未聞である。

大橋・小橋が崩れ流されたため、扶持米が下され、昼夜ともに江川との間で船渡しが行われた。



1854年安政地震津波・火災の記憶

(藤 隆宏)

田辺市[田辺城下・周辺村々]

- 所在地 田辺市東陽31の1
- 関連する災害 安政地震津波・火災
- 制作された年 安政3年(1856)か
- 材質 紙製(和紙)
- サイズ 縦23・8cm 横16・3cm
- 文化財に指定された日 昭和53年(1978)10月13日



田辺市指定文化財
天変諸事記(田所文書)

田辺市立図書館蔵

嘉永7年(1854)11月5日に発生した安政南海地震により、現在の田辺市域では城下町(町人地)周辺と新庄村が特に大きな被害を受けました。新庄村ではほとんどの家が津波で流されました。

城下町では火災が発生し、ほとんどの家屋は焼失するか、津波によって浸水しています。

城下町及び周辺村々の大庄屋の文書である『天変諸事記』には、被害状況のみならず、その後の復興の過程も記録されています。

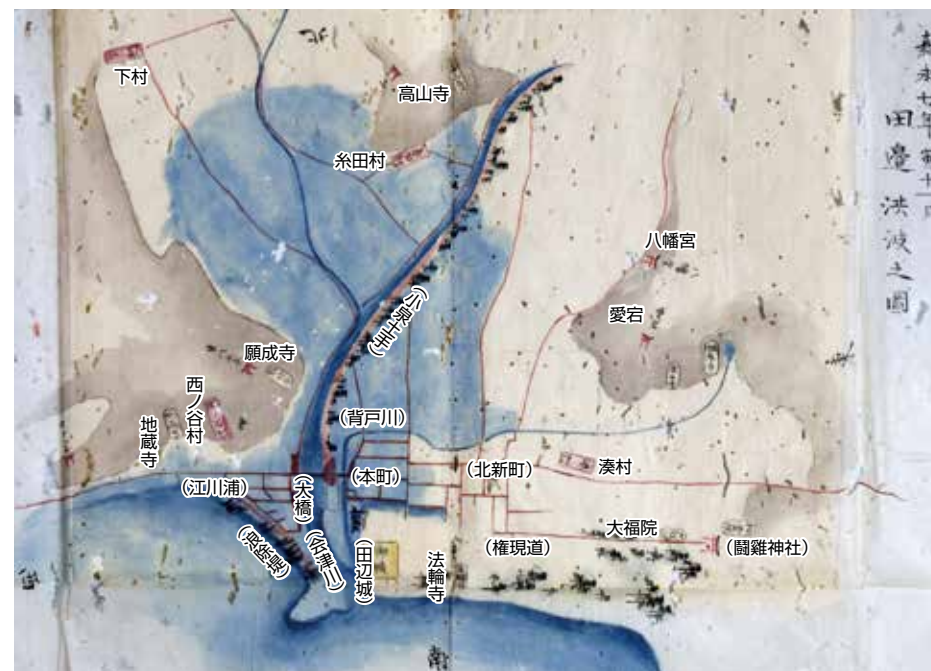


田辺城下・周辺村々における安政地震・津波・火災の主な被害

	町・江川	西ノ谷	湊	神子浜	新庄	合計
流失家屋	2	7	20	4	219	252
倒壊家屋	110		45	1		156
焼失家屋	355		78			433
死者	9			2	2	13

* 家屋被害に蔵等は含まない。

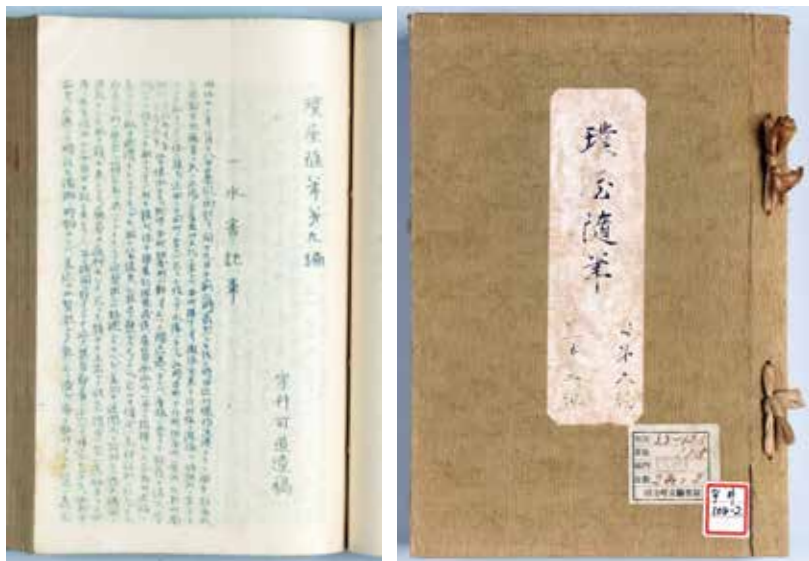
* 『田辺町大帳』(關雞神社蔵)・『大地震津浪出火ニ付荒流失并焼失書上帳』(田所文書)から作成。



田辺洪波之図(『天変諸事記』に収録) 青い部分が津波浸水地域



田辺市中焼土之図(『天変諸事記』に収録) 赤い部分が火災地域



(第九篇)

『瑛屋随筆』は、第一編から第十二編まで一冊ずつ順次刊行されました。田辺市立図書館で所蔵する『瑛屋随筆』は、第一～第五編、第六～第十二編の2冊に合冊され、表紙と題箋が付されています。

田辺市指定文化財
 瑛屋随筆(宇井文書)
 田辺市立図書館蔵



可道も避難した蟻通神社には、「明治22年大水害百周年記念碑」が建てられています。(右のQRコード参照)

所在地 田辺市東陽31の1
 関連する災害 明治22年大水害
 制作された年 昭和11年(1936)
 制作者 宇井可道
 編集・発行者 宇井縫蔵
 材質 紙製
 サイズ 縦24.2cm 横16.8cm
 文化財に指定された日 昭和53年(1978)10月13日



『瑛屋随筆』は、田辺市上三栖出身の宇井可道の残した記録を養子の縫蔵が編集・発行したものです。

第九編に収録される「水害記事」によると、明治22年の水害時、湊村にあった可道の自宅も浸水しました。自身も被災者でありながら、可道は西牟婁郡役所の役人として、住民の救護や被害調査に尽力しました。

歌人でもあった可道は、この時のことを「今とし八月長雨ふりて十九日には山々さけ川々あふれけるときなげきてよめる歌」という長歌に詠んでいます。

可道の残した「水害記事」は、大水害時における西牟婁郡役所での災害対応の様子を知ることができる貴重な記録です。

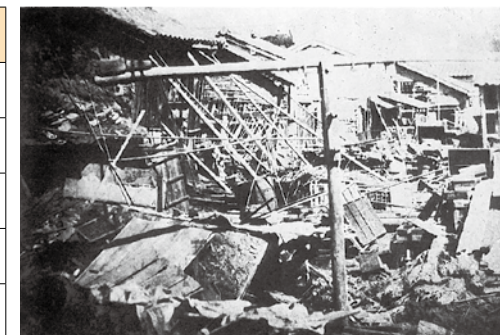


宇井可道(1837～1922)
 『瑛屋集』国立国会図書館デジタルコレクションから

和歌山県全体と西牟婁郡の被害集計

	県全体	西牟婁郡	割合
死者	1,225	906	73.9%
負傷者	341	99	29.0%
流失	3,446	1,492	43.2%
全・半壊	3,222	1,332	41.3%
浸水	29,340	3,966	13.5%

紺屋町の被害の様子



いずれも『紀州田辺明治大水害』から

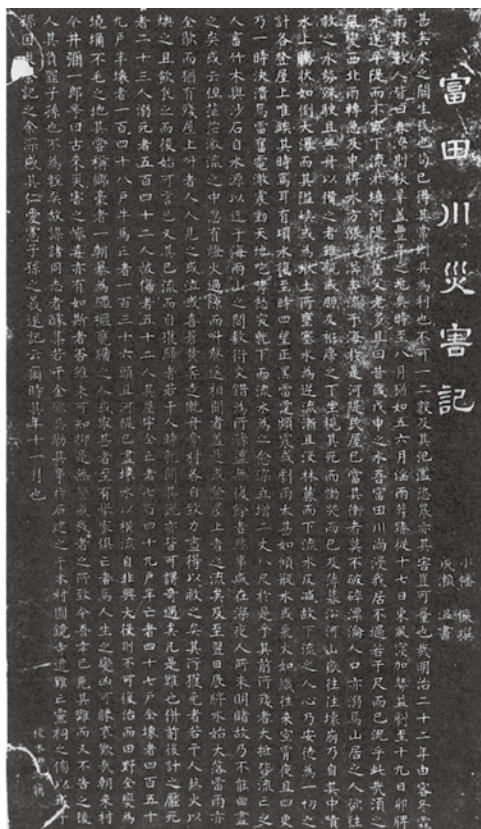
【現代語訳】冒頭部(一)は原文による
 明治22年(1889)8月18日、暴風雨が起こり、同19日午前2時に最も激しくなった。午後3時、田辺川(会津川)の堤防が決壊したと聞き、郡長秋山徳隣やその他庁員と共に出張し、上屋敷町土橋に着くと、本町横丁から激しい波が押し寄せ、片町堀にあふれて、福路町に行こうとしたが船でないと渡れなかった。
 迂回して同町に着くと、すでに小坂まで水が来ていた。この時、本町、下片町、紺屋町、栄町、北新町、南新町(今福町より東の突き当たりまで半分)はみな浸水していた。そのなかでも、本町、紺屋町は軒より上へ2階まで浸水していたので、(逃げ遅れた人々は)屋根に上って救護を待った。
 こうした人々を助けようと思っても船がなければ助けに行くことができなかった。そのため郡書記の深見武造と雇員西山尽一らへ指示し、上屋敷町出崎の者に船を出させようとしたが、船はすべて流失し、またこの指示に応じる者がいなかった。やむを得ずひとまず郡役所に引き上げた。

1889年明治大水害の記憶

(橋本 唯子)



石碑現状(撮影:2021年11月)



『上富田町史』通史編掲載の拓本を転載

「富田川災害記」碑

- 所在地 上富田町朝来1036(円鏡寺境内)
- 関連する災害 明治22年大水害
- 制作された年 明治23年(1890)11月か
- 建立者 今井弥一郎など
- 撰文 小幡儼(儼太郎)
- 書 成瀬温(大域) 石工 榎木源助か
- 材質 御影石か
- サイズ 本体 幅79・3cm 奥行26・5cm 高さ149・0cm
台石 幅116・5cm 奥行74・0cm 高さ27・5cm

小幡儼(げん)(儼太郎)は嘉永元年(1848)生まれ、安井息軒(そっけん)らに師事し、明治14年(1881)から県会議員などを務めた学者・政治家です。明治22年大水害では「奔走斡旋」し、この「富田川災害記」を作りました。書は成瀬温(ゆたか)(大域)によるもので、小幡とは安井を介した交流があったと考えられます。

この資料から、富田川流域の一部で水が堰き止められ、土砂ダムのような状態となり、その後の豪雨でさらに被害が大きくなったことがわかります。上富田町では現在でも毎年8月19日に彦五郎堤防において慰霊祭が営まれています。

【現代語訳】(抜粋)
明治22年(1889)は、冬から長雨が度々あり、春に水が溜まるど秋は日照りとなってそれが豊年の兆しとなるだろうと人びとは言った。しかし8月になって雨は続き、17日から東風が激しくなり、19日午前6時ごろ、水は下流の堤をうずめてしまった。古老は言った、明治元年のころの富田川水害でも若干家が浸水した程度だったので、今回はさらに言うまでもない。しかししばらくして風は西北に変わって雨は急に強くなり、午後4時ごろには水が海に流れようとしていた。堤にあった民家は破壊され、人も溺れた。山沿いにいた人びとが救いに行こうとしたが、水勢がごとくに速く、船の備えもなかった。親戚も朋友も亡くなり、ただ慟哭するしかなかった。薄暮となり山は崩壊して、そこから水が吹き出てくる様子はまるで大きな滝が逆さまとなったようであった。狭い谷間を塞ぎ水が逆流して林と山のふもとを埋没させようとしていた。これによって下流の水はかえって減ったため、そこにいた人びとは安心して屋上の上って時を待った。
しばらくしてまた水が襲ってきた。雷が鳴り、雨は激しく、水は一気に増えて約8・5mにもおよび、残っていた者も皆流されて亡くなった。これらは深夜のことで、人びとは見えない中で呆然と激流の中にいた。叫び声が隙間を過ぎていく。屋上について流されていった人びとだろ。翌日の午前8時ごろ、水は引き雷雨も全くやんだ。なお屋上で叫んでいる人がいる。人びとは涙を流し、喜んで助けに向かった。船を近隣から呼び、力を尽くして救助を試み、若干人を助けることができた。火をたいて温め、飲食してから初めて彼等は次のように言った。流されて自力で助かったのは若干人だった。どうやって助かったかと聞いても皆奇遇だったというばかりだ。この難事を数えると、圧死した人が23人、溺死した人が542人、負傷者52人、家屋流失749戸、一部流失47戸、全壊459戸、半壊118戸、牛馬は136頭失った。堤は崩壊して水は横流し、大規模な工事を行わなければ復旧は難しい。田も野も全く変わってしまった、石が多い荒れた不毛の地となった。かつては勢力を誇った者も、一晩で粗末な家に住む人となり、最も甚だしい場合は家が途絶えてしまった。人生とはなんと哀しいものだろうか。
朝来村の今井弥一郎氏などによると、悲惨な災害は過去にあったかどうかわからないが、我々の無警戒がこのような状況を引き起こした。後の人に告げなければ、子孫が背負う罪は重い。よって同志と謀り、お金を集め、円鏡寺の遭難者の祠付近にこれを記すこととした。私はその子孫への思いを深く理解し、これを記す。榎木源助氏が石を刻む。



彦五郎堤防における慰霊祭の様子(撮影:2021年8月19日)



明治二十二年水害絵図
長野八幡神社蔵

8月19日午後5時ごろ、山すそにあった長野八幡神社が被災しそうになり、氏子7人が危険を冒して、御神体を避難させました。

田辺近郊の土砂災害

明治22年(1889)8月19日午後6時ごろ、奇絶峡下流の右会津川両岸で大規模斜面崩壊が起こり、多量の土石で高さ15mの土砂ダムが形成され、午後9時ごろに決壊しました。

8月20日午前4時ごろ、左会津川左岸の槇山で大規模斜面崩壊が起こり、高さ20mの土砂ダムが形成され、午前9時ごろに決壊しました。

土砂ダムの形成と決壊がくり返したので、泥水が何度も流れ込むとともに、屋敷や田畑には多量の土石が残りました。

凡ヘオヨソ宇宙災害アルハ古ヨリアリト雖(イエド)モ、殊ニ明治廿二年八月ノ水害ハ甚大、恰(アタカ)モ益ヲ覆ヘスガ如クニ、昼夜風雨車軸ヲ流シ、心騰(シントウ)ヲ寒カラシメタリ(以下、略)

絵図に書かれた水害記【原文】

- 所在地 田辺市長野988
- 関連する災害 明治22年大水害
- 制作された年 明治時代後期～大正時代中期 (19世紀末～20世紀初頭)
- 制作者 梅峰
- 材質 絹本墨画淡彩
- サイズ 縦42・5cm 横77・5cm



災害復興記念碑 田辺市伏菟野

- 関連する災害 平成23年大水害
- 建立年月日 平成27年(2015)4月吉日
- 建立 伏菟野区
- 石材 流紋岩(熊野酸性岩類)
- サイズ 高さ 143cm 幅 105cm 奥行 35cm

平成23年(2011)9月4日午前零時15分ごろ、大規模斜面崩壊が発生。多量の土砂が集落に達して、暗闇の中で家屋とともに生き埋めになり、5人が犠牲になりました。

土砂災害の危険度

土の中の水分量を直接はかる代わりに、雨量から計算で求められる土壌雨量指数というのがあります。

それぞれの地域で、過去に土砂災害が発生した時の土壌雨量指数の値がわかっています。これらの値や雨の強さをもとにして、土砂災害の危険度が判定されています。



気象庁ホームページ: [気象庁 | キキクル \(危険度分布\) \(jma.go.jp\)](https://www.jma.go.jp)



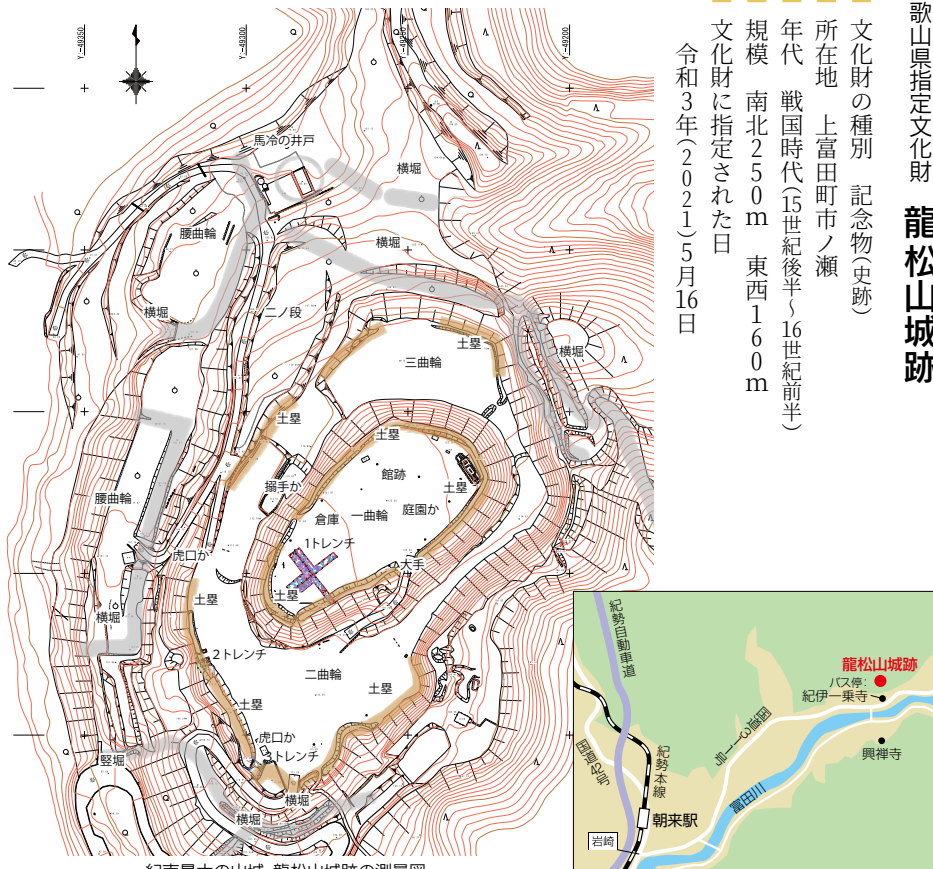
土砂災害慰霊碑 田辺市熊野

- 関連する災害 平成23年大水害
- 建立年月日 令和2年(2020)8月29日
- 建立 熊野区
- 石材 災害で流下した礫岩
- サイズ 高さ 70cm 幅 100cm 奥行 67cm

平成23年(2011)9月4日午前6時35分ごろ、大規模斜面崩壊が発生。多量の土石で土砂ダムが形成され、発生した土石流により11棟が流失、3人が犠牲になりました。



開通した市道(田辺市熊野) 平成23年大水害で、市道は土砂ダムに埋没。新しい市道は土砂ダムを越えて、令和3年7月21日に復旧開通しました。



紀南最大の山城、龍松山城跡の測量図
(上富田町教育委員会2021『山本氏関連城館群総合調査報告書』から)

和歌山県指定文化財
龍松山城跡

- 文化財の種類 記念物(史跡)
- 所在地 上富田町市ノ瀬
- 年代 戦国時代(15世紀後半~16世紀前半)
- 規模 南北250m 東西160m
- 文化財に指定された日
令和3年(2021)5月16日

から、庭園があったと考えられます。こうしたことから、龍松山城跡は単なる山城ではなく、居館としての機能も兼ねた武家の本拠であることがわかりました。

紀南の雄 山本氏

山本氏は、室町時代には室町幕府奉公衆として各地の戦に参加するとともに、戦国時代には紀伊国守護畠山氏の分国支配に協力し、紀南地域に勢力を伸ばしました。

天正13年(1585)の羽柴秀吉の紀州攻めでは抗戦し、熊野の山間部へ逃れ、天正の熊野一揆を煽動しました。

地域で踊り継がれる一瀬大踊り(和歌山県指定無形民俗文化財)では、「一瀬殿のたからのみふね、港へまいる世はめでた」とあり、山本氏の功績は今も地域に息づいています。

山本氏の川替え

山本氏は岩田川の治水を積極的に行い、山本主膳4代目志義が市ノ瀬不動ノ尾の山足を切り取り、川の流路を付け替えたといわれています。山本氏が川替えを行うことで、「岩田川」から「富田川」と呼ばれるようになったとする伝承もあります。



空から見た龍松山城跡



山本氏の「幻の館」とされた坂本付城跡



龍松山城跡(赤線) 上空北から山本氏の支配領域をのぞむ。中央には富田川が流れる。

龍松山城跡は標高約123mの通称辰巻山(たつまきやま)の山頂にあります。山頂の一曲輪を中心として、二曲輪、三曲輪、二ノ段が取り巻くように配置されており、麓から見ると龍がとぐろを巻いたような形をしています。一曲輪の周囲には高さ約6mの急峻な崖を削り出し、土塁を巡らせています。さらに城の南北は、横堀や竖堀により防御性を高めています。令和元年に行われた発掘調査では、15世紀後半から16世紀前半にかけての礎石建物や石積みをもつ土塁、溝などの遺構が確認され、応仁の乱後に築かれた山城であることがわかりました。

城からは多量の土師器が発見され、式三献(しきさんこん)などの武家儀礼が行われていました。また、輸入陶磁器、茶壺や茶臼などの遺物からは、武家の居住区画としての文化的な活動がわかります。さらに、一曲輪からは玉砂利が多く発見されたこと

●和歌山県内に所在する自然災害伝承碑とウェブ地図●



「災害の記憶」事業では本誌も含め、これまで7冊の小冊子(平成27年～令和4年, A5判, 16ページ)と高校生向け冊子(令和2年, A4判, 16ページ)を刊行しました。これらは、和歌山県立博物館ホームページで公開しています。



読者のみなさんが県内の災害の記憶を訪ね歩くのに役立つようにという編集方針により、小冊子には当初から地図を随所に掲載してきました。

高校生向け冊子の刊行にあわせて、自然災害伝承碑や関連施設をグーグルマイマップ上に掲載し、公開しています。ウェブ地図は、目的地までのルートを手持端末で確認できるので便利です。

今年度の調査地である田辺市及び上富田町の伝承碑も反映しています。



令和元年(2019)国土地理院は、災害の教訓を正しく知り、災害による被害の軽減に貢献するため、新たに「自然災害伝承碑」の地図記号を制定しました。国内の伝承碑は市区町村からの情報提供を受け、地理院地図(電子国土Web)に逐次追加されています。「新庄の歴史に親しむ会」等の活動により、田辺市内の伝承碑も掲載されています。



地図記号
「自然災害伝承碑」



この冊子を作成するにあたり、田辺市・田辺市教育委員会・上富田町・上富田町教育委員会のご協力をいただきました。このほか、ご協力いただいた個人の方々のお名前については、紙面の都合で掲載することはできませんでした。この場を借りて、お礼申しあげます。

先人たちが残してくれた「災害の記憶」を未来に伝えるⅦ

— 命と文化遺産とを守るために —

【田辺市・上富田町】

発行日/令和4年(2022)2月26日

編集/和歌山県立博物館

発行/和歌山県立博物館施設活性化事業実行委員会

〒640-8137 和歌山市吹上一丁目4番14号 和歌山県立博物館内

印刷/中和印刷紙器株式会社